慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小野勝年著, 入唐求法巡礼行記の研究 四巻
Sub Title	T. Ono, A study of the Nitto-Guho-Junrei-Koki (The record of a Pilgrimage to T'ang China in search of the law), 4 vols. Tokyo 1964-69
Author	尾崎, 康(Ozaki, Yasushi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1970
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.42, No.3 (1970. 2) ,p.88(352)- 92(356)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19700200-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

奈川県茅ケ崎市東海岸南一ノ一一ノ一六の著者に直接申込まれたいとのこと、実費五五〇円）

小野勝年著
入唐求法巡礼行記の研究　四巻
（鈴木学術財団　昭和三十九年二月―四十四年三月　刊）

尾崎　康

小野勝年氏の入唐求法巡礼行記の研究が五年がかりに完結した。合計二千頁をはるかに越える大著で、慈覚大師円仁の入唐求法巡礼行記とおなじく四巻四冊に分かち、その本文に綿密な校訂を加え、精細な訳注を施したうえに、第一巻巻頭には円仁の旅行、見聞、求法全般の概観（慈覚大師の入唐巡礼）が、第四巻末にはこれら諸問題に関する長篇の研究（入唐求法巡礼行記の研究）が附されている。第一巻刊行の直後に石田幹之助氏が称讃されたとおり（朝日新聞昭和三九年七月六日書評）、内外のあらゆる註釈、校勘、飜訳を凌ぐすぐれた業績である。

円仁の入唐求法巡礼については、行記の古鈔本が明治中葉に東寺観智院で発見されてから、着々と研究が重ねられ評価されてきた。テキストにしても、夙に続々群書類聚（第一二巻・一九〇七年）、大日本仏教全書（第一一三冊・一九一八年）に飜印され、東洋文庫で精巧なコロタイプ版の影印が行われ（東洋文庫論叢第七・一九二六年）、その間にいわゆる池田本が紹介され（四明余霞第三二九号・一九一四年）、また堀一郎氏の全訳もでている（国訳一切経史伝部第二四・一九三五年）。しかし、この学界や仏教界の一部での地味な研究や評価が、一躍脚光を浴び喧伝されるまでにいたったのは、ライシャワー氏が英訳註（Ennin's Diary―The Record of a Pilgrimage to China in Search of the Law, New York, 1955）と研究（Ennin's Travels in T'ang China）の労作を完成されたのが根幹であるが、その氏の駐日大使赴任というきわめてジャーナリスティックな原因によるものであった。これは、その後者がただちに飜訳され（田村完誓訳・世界史上の円仁―唐代中国への旅・一九六三年・実業之日本社）、行記本文の部分訳、解説等が、現代語訳・普及版の古典日本文学全集（堀一郎訳・第一五巻仏教文学集・一九六六年・筑摩書房）や、日本の仏教（壬生台舜著・第三巻叡山の新風・一九六七年・筑摩書房）という一般向けの叢書にも大きく採りあげられたことと、田村氏訳書の邦題名とに象徴的である。

このようなわけで入唐求法巡礼行記は広く知られるようになったが、それにしても円仁の旅行は承和五年から十四年（唐開成三年―大中二年・八三八―八四七）とあしかけ十年の長期にわたり、揚州から山東、五台山、長安等を紆余曲折してめぐつて、その見聞はあまりに多面におよぶ。たとえて挙げてみても、承和遣唐使をめぐる諸事情、揚州の僻村に漂着してからのその行路の地

理的な問題、請益僧円仁の求法巡礼にたいする無理解と会昌の廃仏にともなう唐朝および地方官衙との折衝などにみられる政治や制度に関する記事、五台山、長安への旅の往復ともに困窮したなかで恩恵をえた山東の新羅人について、そしてなにより、寺院、僧制、行事、信仰等、唐代仏教のさまざまな深い観察と円仁自身の求法、ならびに異国僧として直接に体験した会昌の廃仏事件の顚末などがある。これらの多くの問題を含み、国語、俗語もまじえた漢文で書かれた行記四巻の一字一句を註解してゆくことの困難さは、想像するにあまりある。初期の堀氏の訳業（改訳も行われた、国訳一切経史伝部第二五・一九六三年）と、詳細な訳註に加えてこの旅行記の世界史的意義を称えられたライシャワー氏の研究もまことに労作であつたが、小野氏のこの校勘、訳註、研究は、附載の豊富な地図、写真とともに、それらにもまして博引傍証、精細深遠をきわる。それは、氏がかつて円仁にほぼおなじい長い期間を中国に生活し、学び、おなじ五台山等を実地に踏査して、単行本だけでも 五台山(日比野丈夫氏と共著・一九四二年・座右宝刊行会、行記五台山之巻の訳註を収める)、張彦遠の歴代名画記（一九三八年・岩波文庫）、敦崇の燕京歳時記（北京年中行事記・一九四一年・岩波文庫、改訳 一九六七年・平凡社 東洋文庫）の訳註などによつて周知のような、また奈良博物館に勤務して正倉院や南都の大寺の豊富な資料の調査と研究を行い、東洋史、日本上代史、中国の歴史地理、美術史、仏教史、民俗学等に精通された、氏の学殖をもつてはじめて成しとげられたといつて過言ではなかろう。

入唐求法巡礼行記の底本は、むろん正応四年（一二九一）兼胤書写の東寺観智院本（現安藤氏蔵）であるが、事実上この一本しかないところに、まず大きな問題がある。文化二年長海大僧都書写本として池田長田氏が四明余霞に発表されたいわゆる池田本もその実在さえ疑わしく、かりに実際に飜印であつたとしても、誤字、重複が少くてむしろ整つてはいるものの、基本的に観智院本と差異がないといわれる。それも池田氏の死去とともに完全に失せたから、いまや、七十二才の兼胤が京都東山の長楽寺で老眼を拭いつつふるえる手で筆を運んで、脱字、誤字、判読しがたい文字、さらには錯簡、重複まであるにもかかわらず、観智院本と対校すべき諸本がない。この第三代天台座主の重要な著作が、早く慈覚大師伝に利用され、参天台五台山記の成尋により宋の神宗に献呈され、日連の立正安国論などにも引用されながら、室町時代以後、重んじられた記録もみあたらず、この一ないし二本を除いて亡佚したとは、いささか理解しがたいものがある。しかしいずれにしても、右のわずかな資料を参照しうるのみで、いまや完全に孤本になつた観智院本に拠らねばならぬところに、この研究の第一の困難がある。

これにたいし、小野氏が博い知識と深い考証研究によつて、「以意補之」「以意改之」と脱字誤字を訂された努力と、これによつて与えられた学界への貢献ははかりしれないものがある。この校勘は、上述のようなしだいでいささか主観が勝つだけに、周

到になされている。誤脱はもとより、古字、異体字、略字、俗字などもすべて原字が掲げられ、かならず校勘に常字とともに註記されている。印刷の都合でとかく通行体に改めざるをえないものだが、これはむしろぜいたくとさえいえよう。ただし、とくに原文中に意をもつて誤字を訂されたのなら、異体字なども同様に通行体にするか、あるいは本文はすべて原文どおりにして、校訂はすべて註記にまわすか、より一層の統一をはかられた方が、後学の利用には便利であつたかと思わないでもない。

同様のことは、第一、四巻に唐の官庁との折衝の記録がしばしばみえるが、これらの公私の文書についてもいえる。第一巻においては円仁にとつてあらゆる見聞が珍しいから、関連する記事のなかに文書が挿入されている場合が多いが、第四巻では前後数日の記事と内容は連関するものの、文書の日付の当日には記事がなく、ほとんど文書だけが単独で掲げられている。兼胤はこれをとくに改行して写さなかつたから、一見、前日の記事に後日の日付の文書が続いた形になつている。また文書を二、三続けて掲げて、その後者は日記の日付より繰りあげられた場合もある。これを小野氏は理に合わぬとして記事を別にし、また日付の順序に訂し、文書の冒頭にあらためて括弧をつけて日付をたてられた。しかし、もともと行記は円仁自身か門弟かによつてその具注暦のような日記から抄録編纂されたものであつて、これら文書も重要性を認められてその箇所に単独にあるいは纏めてとりあげられたのであろうから、これは改行され、あるいは一行をあけてそのまま掲示されるべきであつて、本来、前日の記事からは独立しているはずのものである。まして公文書の場合、日付の当日に円仁が入手しなかつた場合もあろうから、記事を別にすることは当然として、順序を改めたり日記の日付をたてることにはかならずしも同意しがたい。いずれも熟慮の末に妥当として取られた方法であろうが、すべてに明確な註記があり、万全の措置がとられているだけに、原文により忠実であること、いわば観智院本の飜刻たることを望む気持にいつそう駈られたしだいである。

訳文は文語体のいわゆる書きくだし文であるが、国訳として助詞、助動詞などの使用に細心の注意が払われて文体を整えている。ただし、動詞などをあまりにかながきしすぎる傾向がある。唐代に関係の深い史籍の近年の訳業としては、ただちに内田智雄氏の主宰された訳注中国歴代刑法志（創文社・一九六四年）と増井経夫氏の史通―唐代の歴史観―（平凡社・一九六六年）とを思いうかべるものであるが、この両者が流麗な現代文のなかに多くの意味をこめた名訳であるのにたいして、小野氏のこの行記の訳はこれらと大きく異つてもつともオーソードックスであり、詳密な註とあいまつて、あくまでも史料としての意味を強く前面にうちだされたものである。

そして註釈であるが、まつたく精細そのものであつて、氏が永年にわたつていかに努力を傾けられたかが行間に溢れている。前に述べたように求法僧円仁の九年にわたる異国での見聞、体験として、仏教を中心とするあらゆる分野にわたるその一つ一つを、綿

密に考証されたのである。日記の本文がすべて五百九十五条、これにいくつかづつなされた註の数は幾千になるであろうか。それが、ライシャワー氏の訳註を参照してしばしばこれを訂正されるのはもとより、古今の和漢の資料研究数百を引いて論証され、しかも多くの場合、直接に引用資料を提示されて後学の研究に資される。これらの註解のために、氏にはすでに二十篇にもおよぶ論考がある。断中の語義について、牛場真玄氏と論義を交されたことも周知のとおりである。そのほか赤山の法花院、晋陽の童子寺、長安の西明寺など唐の諸寺院、知玄らの唐僧、わが入唐僧、仏教儀礼や美術、疋段と称する絹布とその単位、円仁の将来仏典と前唐院見在書目録、さらに異体字についてなど、円仁の紀行以上の多面にわたり、詳細をきわめる。本書にはわずか数行に要約された註も、論考は数ないし十数頁をかけ、多くの資料を駆使されて成つたものであることはいうまでもない。これらの研究はそれぞれ関係の箇所に指摘されているから、かならず参照すべきである。

そして第四巻末に原文、研究を含めて索引が附されたから、これが単に検索の便をはかるにとどまらず、ちよつとした事典の役割を果す。検索の面も、妙見菩薩などおなじ語句の説明が二箇所以上にわたる場合もあるし、出典や関係の研究を知るのに想像以上に便利である。ついでにいえば、第三巻までの正誤表が巻四に添えられたのも親切である。ただし、巻四にも一、二誤りがみえる。

最後に研究であるが、二百二十頁にのぼる長篇で、大きく二章に分たれ、第一は円仁の入唐事情とその経過、第二は「行記」を通じてみた円仁の求法と唐代仏教と題し、旅行と仏教とを考察されている。これらの問題については、岡田正之氏の慈覚大師の入唐紀行について（東洋学報一一―四～一三―一・一九二一～二三年）以来いくつもの論考がみられ、とくにライシャワー氏の訳註と研究は小野氏と同様に行記全巻にわたり、したがつて共通した問題を相似た観点から論ぜざるをえない場合が少くないが、上述したような厳密な本文の校訂と詳密な語句の解釈の上にたつて、しかもより綜合的に論じられたところに小野氏の研究の最大の特色がある。

すなわち第一章でとりあげられた問題は、円仁の請益僧拝命とその背景、承和遣唐使の経過、円仁と新羅人、唐の官庁と円仁の旅行体験であつて、単に円仁の旅程を追跡するのみでないことはもとより（これは第一巻所載の序説で十分になされている）、円仁の旅行に関連し、また行記の一節を利用してある問題を論ずるのでもない。とくに旅行記であるだけに日本人、新羅人、唐人いずれにしても、僧侶、訳語、官人ら円仁と直接間接の関係をもつたひとりひとりがはるかに明確にされ、円仁との人間関係を通じて節名にあらわれたような多くの問題が考えられているように、体験、見聞の類についてもその内容が十分に明らかにされた上で、すべて円仁を中心として論ぜられている。第二章のうちの会昌廃仏と円仁においても、遭難者、被害者としての円仁の主観的

な立場と、外国人、日記という客観性をもつ立場とが考慮され、廃仏事件にたいする円仁の考えかたにも触れられるのである。その意味でこの研究はさきに発表された論文の題名どおり（史泉二五・一九六〇年）、まさに 円仁入唐求法の研究 である。このことは、たとえば 慈覚大師研究（天台学会・一九六四年）に収められた四十数篇もの、諸氏の精緻でしかし個別的な論考などをみると、いつそうその感が深い。個別的な問題は註釈において具体的に説明し、研究には原著および原著者を中心とした大きな立場をとられたことは、著者の見識を示すものである。

第二章も基本的にはまつたくこの立場で論述され、諸寺院、僧制と教団、仏教行事、法会と行法、通俗信仰とくに五台山仏教、諸宗派とその求得 の六節におよぶ唐代仏教論のすべてに、円仁のみた の五字が冠せられている。そして、円仁の密教受容、会昌廃仏と円仁 の二節が続くのである。仏教について いよいよ知るところのないわたくしはこれらの論考について言及できないのであるが、氏が単に東洋史学者たるにとどまらず、仏教史、仏教美術史家としての面目をここに遺憾なく発揮されたことは明らかである。先の訳註にしても、もとより広範な問題を網羅しているから、註解された事項がすべて明快に説明されたわけでなく、不明なままたその旨を提起された問題も多い。これを克服して行くことが、この研究の恩恵に浴するものの責務であろう。

附録に円仁の将来目録たる 入唐新求聖教目録 が添えられ、図版も質量ともに豊富で、名著をいつそう価値あらしめている。

E. W. Zeeden, Hardenberg und der Gedanke einer Volksvertretung in Preussen 1807–1812, 1965, Kraus Reprint LTD.

東畑隆介

本書は一九四〇年にベルリンで刊行され、六五年にアメリカの Kraus 社からリプリントの形で刊行された。従つて、刊行年度の点からみれば、今更紹介する必要もないと云えるかもしれない。しかし、本書に限らず、この時期に刊行されたものは当時洋書の輸入が困難であつたゝめ、研究者に利用されることが少かつたし、ドイツ本国における「シュタイン・ハルデンベルクの改革」の研究が、専らシュタインに関心を集中して進められたゝめ(1)に、我が国の研究でも、ハルデンベルクと彼の改革については、論じられることが少かつた。このような研究の空白を埋める意味で、本書を紹介することは必ずしも無意味なことではないであろう。

本書の内容を紹介すると、本書は「改革」の主要時期にあたる一八〇七年から一八一二年までのハルデンベルクの国民代表の思想、計画を当時のプロイセンの憲法思想と関連させて論じたもので、一、一八〇七――一八一〇年の改革期の刺激、二、宰相就任後のハルデンベルクの代表の試み（一八一〇――一八一二年）及